

【KOOSAIHO とは】

自然の色彩は、太陽という光と、地球という影によって作りだされる色です。

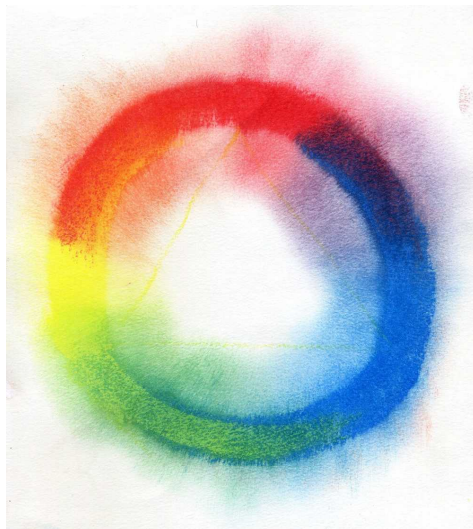
太陽の光と地球の影が出会って色彩が姿を現す。

光という輝きと、影という闇との間に色彩は生まれ、それを我々人間が認識します。

そしてその色彩が……虹色という色彩の中に現れている。とすることができます。

この虹の色が複雑に重なり合うことで無数の色彩が生みだされる。

そしてこの虹の色は、赤・青・黄という最もシンプルな三つの個性の関わりによって現すことができます。



KOOSAIHO は、この虹の色を構成する色を、自然の色彩の中に観察しながら、各各を、個性に合わせて、順に重ね合わせて行きます。

＜重ねる色の説明をする前に、絵の基底となる画用紙について＞

絵を描く際の画用紙の色を、光の輝きと見做すことにします。

（ちなみに、光は、物質的な明るさではないため、絵の具の白で光の色を現すことはできません。唯一、絵の具のどの色よりも明るい画用紙の明るさを、光の色に見立てて話を進めさせて頂きます。）

つまり、画用紙の明るさが、色を生じさせる一方の極です。

ですから、この明るさから出発して、影に向かいながら色彩は生じる。とすることができます。

そしてこれは逆も言えます。

つまり、最も暗い影の色から出発して、光に向かう色彩が生じてくる。・・・と。

ですから、描く前の画用紙は、まだ何の色も生じていない基点です。

これを人間のことにたとえるならば、目の前にまだ何もない、光も影も生じていない状態です。

そしてここに、虹の色の最も明るい黄色が乗ることで変化が生じます。



1、先ず、虹の色の中で最も明るい黄色を、指の腹に擦りつけて画面全体に薄くうすく広げてゆきます。

この時わたしたちは、輝きを持つ黄色ではなくて、影を帯びた黄色を見ることになります。

この黄色は、輝かせてくれる色と出会うまでは輝くことができません。



2、そしてここに、実際の風景を観察しながら、影の色・・・つまり青を、ごく薄く指の腹に擦りつけて（影の中に隠れている青の色に意識を集中しながら）載せてゆきます。



3、影の濃いところと薄いところを観察しながら、空の色は極うすく、緑の中には濃くのせてゆきます。

（※黄色の強さに見合う程度に加減しながらのせてゆきます。）



4、しかし、ここではまだモノの姿らしきものは現れていません。
光に対する影の存在が確認できるだけです。



5、青を載せたら、ふたたび黄色に意識を向けます。
すると、最初感じたときとは違った黄色が感じられてきます。
これは、画面の中に青が入ったことで、互いの関係性が生じ、黄色（明るい色）は、青（影の色）によって、より輝きたいと望む、観察する個人の個性に応じて、最初より強く感じられてきます。



6、黄色に意識を集中するとどうじに、青の強さにも意識を向けながら（青に導かれるように）自分の感じる強さで黄色を重ねてゆきます。

※とにかく、色に集中してください。意識が形に向かうと、色がまったく見えなくなって濁りを生じさせてしまいます。



7、青に見合う程度の黄色を載せたら、ふたたび青に意識を切り替えます。・・・と、このよう黄色と青の重ねを繰り返しながら、どうしてもモノの姿が欲しいと感じたとき、青で、極うすく、自分の感

じる線（概念化されていないイメージ）を描いて行きます。

指で描いたり、直接クレヨンを当てて描いたり、そのときの自分の感性に従います。



8、このように、黄色という、虹の色の中で最も明るい色と、青という影の個性によって、空間（風景）が現れてきます。

・ ・ しかしここにはまだ、実体というものが感じられません。



9、黄色と青を重ねてゆき、もうこれ以上重ねられない、……つまり、山が山として、木が木として、葉っぱが葉っぱとして、土が

土としてその姿を強く求めるとき、そのときはじめて赤に進みます。



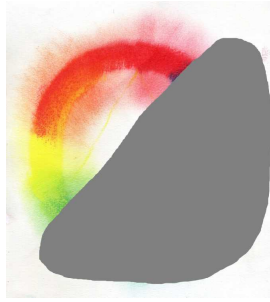
10、そしてどうぞ、木の幹や、石や、物の形のある部分に、指の腹に少しだけ擦りつけた赤を置いてみてください。



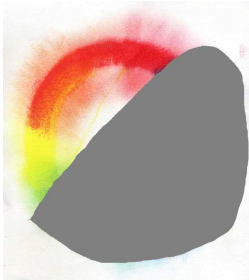
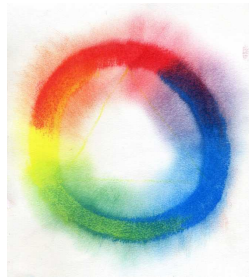
そのとき……はじめて、モノの実体が絵の中に入った。……と、感じられることでしょう。

※つまり、黄色の明るさ、青の影、赤の実質。……とは、それぞれ三つの色にある個性なのです。

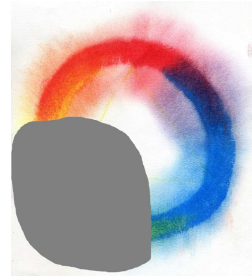
昼の色



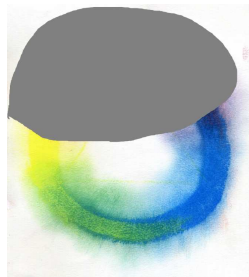
虹の色



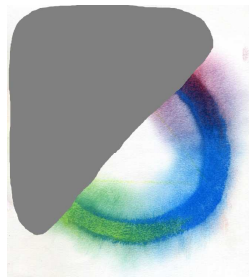
青がないときの黄色と赤



黄色がないときの青と赤



赤がないときの青と黄色



夜の色

※上図のように、三つの個性があってそれぞれの色を輝かせている。

この三つの個性の連鎖が、その他の紫や、オレンジや、群青や、赤紫や、緑という個性の誕生に繋がっている。

そして、このような色の体験が・・・自然の色彩の観察に止まることなく、自己の内面へと世界を広げてくれます。

……最初に、画用紙の明るさを、虹の色を現す一方の極（基）と見做すことができたのは、実は、われわれ人間の側に、もう一方の極、つまり、暗さの基があるからなのです。

※そのために、KOOSAIHI では、黒の使用を極力控えるように勧めています。（画面の中に黒が入ったところから、深い色の観察が困難になるためです）

われわれ人間の内面には、認識できないほど暗い影の色（宇宙）が広がっていて、そこから、光の方に顔を向けて、色彩であるものを認識してゆく。

この、光と影の現す虹を探究することが、人間の探究に繋がってゆく。と、考えます。

2026 年 7 月 瀬崎正人